



学校長 西 裕之

11月8日に本校で小学校教育課程研究集会・県西部図画工作科研究会が開催され、2年間の研究の集大成となりました。本校のような小規模校が研究指定を受ける機会は少なく、この2年間は、図画工作科を通して、多くのことを学ばせていただきました。

ここに1枚の絵があります。この絵は、2年生の児童が、
とろとろ絵の具（液体粘土）に水彩絵の具を混ぜ、指先や手
のひらを使って描いた絵です。（浮き上がっている部分があ
るのですが、写真では伝わりにくいのが残念）

この題材は最初から何か描きたいものを決めて描くということではなく、とろとろ絵の具でできる「とろとろわざ」を見付けようということから始まりました。

この児童は、最初は青や紫の色を作り、指でとろとろ絵の具を引っ張るように描いていました。次に、とろとろ絵の具を指に付け、紙の上からはじくように絵の具を落とす「はじきわざ」を見付け、落とす高さや方向をいろいろ変えながら



「走るライオン」

描き始めました。すると、絵の具が浮き上がり、凹凸のある絵になりました。それを見た周りの友達は、「えーっ、面白い！さすが〇〇くん」と感心し、その技がどんどん友達に広がっていきました。

それだけで十分素敵な作品だと思ったのですが、最後の1時間で作品は一変します。その児童は、手のひらいっぱい黄色の絵の具をのぼし、楽しそうにべたべたと塗り始めたのです。凹凸のある青や紫の部分が見えなくなっていました。私は、どうしてだろうと不思議でした。

作品が出来上がり、自分の作品を見て「何に見えるだろう」と、何かに見立てる活動をしました。特に何かテーマを決めて描いたわけではないので、頭を悩ませている様子です。そして、この児童の作品カードには次のように書いてありました。

はじきわさをたくさん使ったら、けっかん（血管）みたいに見えました。力づよいライオンみたいでした。のぼしわざで黄色をのぼすと、ライオンが走っているように見えました。大人のライオンみたいに見えました。

私は、この児童の豊かな感性に驚かされました。私たち大人は、きれいで整った作品を上手な作品と捉えてしまうかもしれません。しかし、決してそうではなく、自分の内にある感情を表出させ、楽しく豊かに創造していくことが何よりも大切なのです。特に、児童期にそのような経験をたくさんすることで、感性が磨かれるのだと考えます。ですから、子供たちの作品はどれも素晴らしい作品なのです。

この2年間の研究で、最初は発想・構想することへの抵抗が見られた児童も、自分の描きたい・造りたい世界が次第にもてるようになり、感じたままやってみるという姿が多く見られるようになりました。図画工作科の学びで磨かれる感性。今、私自身が感性を磨かなければいけないと感じています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ 学校からのお知らせ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

◆全国 ICT教育アワード総務大臣賞を受賞しました

本校は、昨年度から上庄小学校・灘浦小学校の3校と合同学習を進めており、オンライン学習や合同体験学習を通して、子供たちの交流を図っています。10月下旬には、5年生が灘浦小の5年生と一人一台端末でつながり、算数の1単元（5時間）をオンラインで学習しました。宿泊学習ですっかり顔なじみになっていることもあり、灘浦小の5年生4名と合わせて11名が同じ教室にいるような雰囲気です。オンライン学習のよさは、人数が増えることで多様な考えに触れ、新しい気づきが生まれることです。

これらの取組が評価され、今回、総務大臣賞を受賞する運びとなりました。11月17日に東京の国際ファッションセンターホールで行われた授賞式には、氷見市長が出席され、3校の取組をプレゼンされました。今後も、オンライン学習と合同体験学習を融合させたハイブリッド型学習を進めていきます。